

鑑賞主体の注視と読み取り方に着目した 地域絵図の描き方に関する研究

5211D019-6 谷口 亮*

TANIGUCHI Ryo

景観計画において多視点的な表現媒体が求められるなか、本研究では地域絵図に着目して、その描かれ方と主体の注視-認識の関係を明らかにすることを目的とする。そこで地域絵図の構成と主体の注視-認識に関する仮説的枠組みを提出し、アイマークレコーダを用いた視覚実験を通して描かれ方との関係の一端を明らかにした。その結果、構図的な中心性を持つエレメントや、動的なエレメントが認識に寄与することなどが分かった。以上にもとづいて、地域絵図製作の知見を導いた。

キーワード: 地域絵図, 地域景観, アイマークレコーダ, 描画方法

1. はじめに

(1) 研究の背景

現代は多様な主体が存在し、様々な見方で地域景観が捉えられている時代である。さらに地域景観といっても、個人の風景体験に即したのものや、茫漠とした地域へのイメージ、または実際の形態としての地域景観など、多様な相があると考えられる。そのため、単視点的な表現媒体である写真や透視図では地域の一面しか捉えられない。そこで、様々な相やスケールによって成立している多視点的な地域景観を優れた想像力によって編成し、像として可視化できる表現媒体の一つとして絵図に着目する。

優れた想像力に基づいて編成された地域景観像とは、中村によれば略画的都市像と呼ばれているようなものと考えられる¹⁾。地域絵図によって地域の景観像を反映した具体的なイメージを直感的に伝えることができるならば、絵図は地域景観計画における現状と将来を議論するためのコミュニケーションツール足り得るだろう。またそれは、主体への地域に対する発見を促すメッセージにもなりうると考えられ、描かれた地域を読み取った主体の、自己の地域への共通認識を醸成する役割も果たすに違いない。このように、適切な想像力をもってして編成された地域を視覚化することは、個人の風景体験を豊かにし集団イメージの構築に寄与しながら、地域の将来像をまとめ上げてゆく契機になると考えられる。

その中で、景観計画に即した表現媒体の製作から読み取りまでのプロセスは、製作主体が地域の特徴をよりよく捉えて表現し、それを鑑賞主体に伝達するというものであると考えられる。ここでの観点は、“表現すること”と“伝えること”であると捉えれば、これまでの景観計画における地域絵図は、表現側に重きを置いて様々なヴァリエーションが生み出されが、果たしてそれが鑑賞主体に対する伝達は未知の部分が多いと考えられる。

(2) 研究の目的

本研究では、地域絵図に対する注視と読み取りの关系到焦点を当て、主に主体の知覚特性の側面の一端を明らかにすることで地域絵図を描くための知見を得る。すなわち、地域絵図に対する鑑賞主体の注視-認識との関係とその描かれ方の関係を明らかにすることを第一の目的とする。加えて、仮説的枠組みと実験結果から地域絵図の描き方に関する知見を導出することを第二の目的とする。その結果を踏まえて実際の地域絵図を製作すること試みる。

2. 本研究の位置づけと方法

(1) 既存文献の整理

絵図研究は学際的に行われており、それぞれの分野で主題となるテーマや方法論は異なる。ここでは、主に景観研究における絵図研究の代表的な3つの観点について敷衍し、本研究の位置付けを示す。

a) 景観認識の反映としての絵図研究^{2) 3) 4)}

絵図を当該地域のかつての景観を表象している媒体と見なして、過去の地域の景観の姿や、人々による地域や社会、空間認識の仕組みを明らかにする方向の研究がこの観点である。つまり、表現されたものの意図を汲み取る解釈論的研究である。また、絵師に焦点を当てた研究として鋳形惠斎や五雲亭貞秀、吉田初三郎に関する研究に蓄積が見られる。

b) 絵図の構図論的研究^{5) 6) 7)}

絵図や絵画を景観の規範的な構図が捉えられているとしてその構図特性や要素の構成のパターンを研究する。また、描かれた図像の技法を解明しようとする研究もみられる。あくまで図像の構成パターンや構成内容の実態を把握化して類型化することを目的としている。



図-1 江戸名所之絵

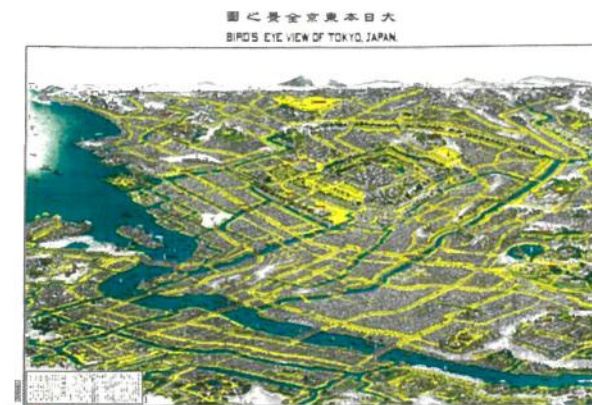


図-2 大日本東京全景之図

c) 絵図の記述論的研究^{8) 9) 10) 11)}

都市計画、景観計画における絵図の具体的な利用方法や描画方法を考える。そのために、デフォルメ空間や画面構成、地域の記述方法を探っていく観点である。ここでの論点は、地域の何を、どのように解釈して、誰に向けて、どう描くかという製作者の論理である。

(2) 研究の位置付け

本研究は、絵図を注視する主体の地域の読み取りや地域認識を問題とするため、製作者側の思想や人間の空間認識自体を明らかにする研究ではない。構図論的知見は参照するもののそれ自体の解明が目的ではない。あくまで本研究の特徴は、描画方法に関する知見を明らかにするという点であり記述論的研究に位置づけられる。その中でも、鑑賞主体の知覚的な側面に着目する。そのため一連の視線走査研究の知見を用いることから、本研究は、絵図の記述論に対して認知心理学的なアプローチを用いる研究だと述べることができる。

(3) 研究の方法と構成

地域絵図が鑑賞主体に伝達することのできる内容の一つとして、地域に対する総合的な理解としての“地域認識”があるとし、鑑賞主体の地域絵図による地域認識の内実を既往研究を参照して説明し、地域絵図に対する鑑賞主体の注視-認識を組み込んだ仮説的な枠組みをつくる。次に過去の地域絵図を対象にアイマークレコーダを用いた視覚実験によって得られた注視点データを用いてGISによるメッシュ分析を行う。また鑑賞主体が読み取った内容を発話により抽出し、発話分析を行うことで読み取った内容と描注視や図像との関係を考察する。仮説的枠組みを参照しながら、実験によって得られた結果をもとにして地域絵図を描くための知見を導出する。

3. 地域絵図の定義と対象とする地域絵図

(1) 本研究の地域絵図の定義

本研究において地域絵図とは「一視点からでは捉えられない地域の全体像と部分像を同時に表現でき、主体に地域認識をもたらす視覚的表現媒体」と定義する。デフォルメによって地相やスケールに多視点性を持たせることができるという点で、写真や透視図、地図とは異なる次元にある表現媒体と位置づける。

絵図は、土地所有形態や災害状況を説明するためや、世界観を表すためなど様々な目的をもって描かれてきた¹²⁾。ここでは、ある地域に着目してその全体を描いたものに着目するため“地域”絵図とよぶ。

描画される地域が一定の範囲を持つこと、描かれる地域は要素の構成により成っていることから、地域絵図の描き方を記述する上での観点を以下の3点に分ける。

A: 構図

B: エレメント

構図とはエレメントの画面上での配置や地域の方向である。エレメントとは、地域を構成する要素のことである。

(2) 対象とする絵図

対象絵図を図-1、図-2に示す。

a) 鍛形惠齋画「江戸名所之絵」(1803)¹³⁾

民間刊行された絵図である。当時、江戸観光に訪れた人々のための土産物として流行を博し、1806年には再版されている。後に同絵師によって「江戸一目図屏風」という津山城のふすま絵として新たに描かれることになる。江戸をこの構図で描いたのは本絵図が初めてであり、後の江戸を描く絵師たちに大きな影響を与えたとされ、類似の構図を持つ作品が数多く制作された。

b) 手塚雲乗画「大日本東京全景之図」(1907)¹⁴⁾

民間刊行され、15銭で販売された。制作者の手塚は、

内外から数万の観光客が訪れる東京にあって、市街地全域をわかりやすく示す絵図が無いことを嘆き7年余りをかけ完成させた。この絵図によって、観光客は自由に各所を巡覧でき、地方の人も座して東京を知ることができるだろうと述べている¹⁵⁾。

c) 選定理由

第一に、地域全体を多視点的な表現を用いて描いていると考えられる為である。第二に、歴史的な評価がなされているためである。第三に、過去の地域であることから被験者にとって虚構性が担保され、実体験の記憶のファクタが極力排除され、主体の地域絵図に対する知覚レベルに則った注視や認識が行われると考えたためである。

4. 絵図による地域認識と注視-認識

(1) 地域認識とその要件

地域絵図を鑑賞する主体が、その地域に関する体験のをしているか否かによって、絵図に対する捉え方が異なると考えられる。主に住民など、絵図に描かれた地域に対する体験を有していれば、その主体は地域絵図をとそれぞれが持っている現実の環境イメージと文化の中で地域絵図を読み取るだろう。それに対して主に来訪者のように、その地域での体験が無い主体にとっては、地域絵図に描かれた地域があくまでも本物の地域であると理解されると考えられる。本研究では、当該地域に対する体験が無いことを研究の場合として設定する。

そこで、その主体が地域絵図を読むこととは、地域絵図に対する認識を随時形成してゆく過程だと捉えられる。これを地域絵図によって“つくられる”地域認識と定義する。つまり、地域絵図によって意図的に編集・構築された地域を主体が見ることで、「あ、この地域はこうなっているんだ」とその場で理解することによる仮想的な地域認識である。

そこで、佐々木によって示された地域絵図による地域認識のメカニズムを参照する¹⁶⁾。佐々木が援用しているのは、ケヴィン・リンチによる環境イメージである。リンチによると、環境のイメージには3つの観点から分析できるとしている¹⁷⁾。

- ① エレメントが識別できる (identity と element)
- ② 識別したエレメントの関係性がわかる (structure)
- ③ 関係性の意味がわかる (meaning)

これらが同時的に起こることが、環境イメージを理解するということだとする。これを地域に対する理解を構成する要因だと考える。そこで本研究では、以上の3つを【エレメントを識別】【エレメントの関係性】【エレメントの関係性の意味】を地域認識の要件と捉える。

(2) 読み取り作用と印象化について

地域認識の元となる情報を、地域絵図からいかにして読み取るのか、その読み取り方を問題としなくてはならない。ここでは風景論における風景に対する主体の捉え方の2類型として“景観把握モデル¹⁸⁾”と“仮想行動モデル¹⁹⁾”に範を得る。

a) 外に出る視点 (景観把握モデル)

鑑賞主体が分析的に絵図の内容を読み取る場合である。遠近の関係や、場所の形、名称を、論理的に読み取る。例えば、りんごを見たときに「これはりんごである」と分かるような記号的な読み取り方である。

この視点によって、鑑賞主体は絵図に描かれたそれぞれのエレメントを識別し読み取ってゆく。例えば、ある点的なエレメント a を a である、と了解し、別の点的なエレメント b を b であると了解する。そして、それら a と b が線的なエレメント c で接続されているとき、両者を a と b が c によって“繋がっている”と了解するような仕方である。

b) 中に入る視点 (仮想行動モデル)

もう一つは、鑑賞主体が対象を見ると同時に、無意識にその中に入り込んで行動しようとする心的機構である。人物や乗り物、視点場などを手掛かりにして絵図の中に入り込んで、身体感覚を伴いながら体験的に読み取る方法である。閉鎖的な領域の中を仮想行動するだけでなく、たとえば道や鉄道に沿って、移動を伴った仮想行動も考えられる。これによって、描かれた地域の継起的体験と理解が可能になると考えられる。

c) 印象化

鑑賞主体は、上述の2つの読み取り方で絵図の内容を読み取ってゆく中で、強く印象に残るものがあると考えられる。この読み取りの際にエレメントが強く印象づけられることを、本研究では印象化と定義する。

(3) 注視

絵図はあくまで図形記号の集積である。そこで、絵図は実際の景観体験とは異なり、あくまで絵図を図として眺める体験であるため、主体の注視がより問題となると考えられる。

鑑賞主体は提示された地域絵図を意識的に眺める。眼球運動の研究においては、人はある場所を注視し、視点を動かし、また注視をし、といったように断続的に注視を行い外界の情報を取得してゆくとされている。つまり注視は、主体が情報を取得する最初の行為であり、その振る舞いやパターンには、外界情報の取得の内容に関する何らかの示唆が見受けられるはずである。

ここで、鑑賞主体が注視しやすい図形的な特徴を、既存研究から引用する²⁰⁾。

- ・コントラストエッジ

- ・図形の角
- ・運動体
- ・図形の出現と消滅
- ・不規則部分
- ・連続性

画像一般について述べられたものだが、地域絵図も様々な形を持つ図形記号の集積だと捉えれば、これらの法則が成り立つと考えられる。

(4) 仮説的枠組み

以上の知見を総合すると、絵図を眺めることとは以下のように示すことができる。

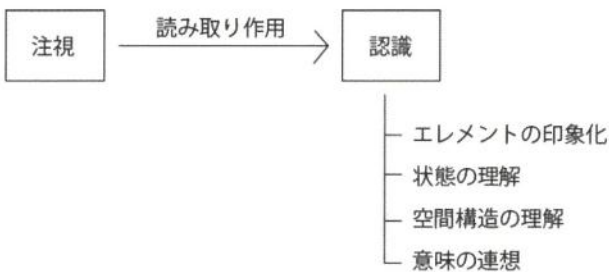


図-3 主体の注視と認識に関する仮説的枠組

絵図の図形的な特徴を、半ば無意識的反応である注視がとらえる。読み取り作用である、2つの視点によって、絵図を認識する。認識については、さまざまな内容の認識が想定できる。

5. 地域絵図の図像的特徴

(1) 7つの描画要件

対象とする絵図を観察したところ、絵図に描かれる要素は次の7つにまとめることができた(図-3)。なお、方向は図示でないので図には描き入れない。

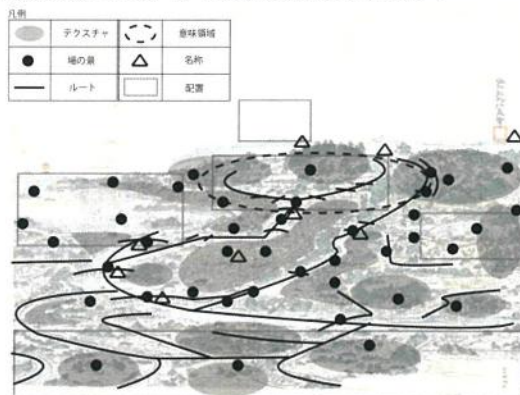


図-4 「江戸名所之絵」描画要件の抽出

これらを、地域絵図を描く際に重要となる要件と定義

する。

- ・テクスチャ：土地の様相
- ・場の景：場所を特徴づける風物や事物
- ・ルート：地域を巡る道筋
- ・意味領域：場所の意味を強調するような領域
- ・名称：地名や建物などの名前
- ・配置：画面内の要素の配置の工夫
- ・方向：描く方向

以上を3章で示した絵図の構図とエレメントの具体的内容と捉える。このうち上の5つを絵図のエレメントとする。下の2つを地域絵図の構図に関する観点とする。

6. 注視と認識に関する視覚実験の結果と分析

(1) 実験の概要

実験は「江戸名所之絵」と「大日本東京全景之図」の2枚の地域絵図を用いて行う。被験者は早稲田大学創造理工学部、および創造理工学研究科の学生13人であり、それぞれの絵図に対して別の日に実験を行った(表-1)。それは連続して実験を行うことにより、前に見た地域絵図の知識や印象による影響を、次に見る絵図に対して最小限に抑えるためである。

表-1 視覚実験の被験者と実施日

対象絵図		江戸名所之絵	大日本東京全景之図
被験者Noと 実験日	①	男・23 2012/11/15	2012/11/20
	②	女・22 2012/11/17	2012/11/20
	③	男・23 2012/11/19	2012/11/20
	④	男・23 2012/11/20	2012/11/24
	⑤	男・24 2012/11/17	2012/11/20
	⑥	女・22 2012/11/19	2012/12/6
	⑦	男・23 2012/12/6	2012/11/19
	⑧	男・24 2012/12/6	2012/12/5
	⑨	男・23 2012/11/20	2012/12/18
	⑩	女・24 2012/12/18	2012/12/19
	⑪	男・22 2012/12/18	2012/12/19
	⑫	女・24 2012/12/18	2012/12/21
	⑬	男・28 2012/12/20	2012/12/21

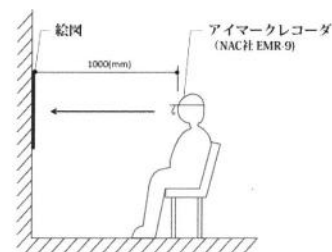


図-5 アイマーク実験の様子

実験方法は次の通りである。最初に被験者にアイマークレコーダを装着し、1m離れた地点から絵図(A1サイ

ズに拡大)を眺めさせ、視線データを得る(図-5)。次に、アイマークレコーダを外し、A3にコピーした絵図を渡し、「印象に残った場所」を、図示させる。続いて、その図示したそれぞれの場所について、その場所で何をみたか語ってもらう。最後に、絵図を見ない状態で「地域全体に対して理解したこと」を語ってもらう。

なお、地域絵図の本来の鑑賞は、主体が遠くから見渡したり、近づいて細部を見たりなどといったように様々な距離帯から見るものである。今回はアイマークレコーダの性能上、近づいて見ることで得られる視線データに解析上問題になる大きな誤差が発生することが分かったため、一定距離から絵図を見る実験とした。そのためこの視覚実験は、絵図に対する注視と認識の側面を検証するものである。今回の分析では印象に残った場所についての発話データは扱わない。

(2) 実験の意図と仮説的枠組みのモデルとの関係

アイマーク実験は鑑賞主体の絵図に対する注視の特徴を捉えるために行う。注視は絵図の読み取りに際して、重要なファクタであると考えられるからである。これによって、鑑賞主体は絵図から情報を読み取る。仮説的枠組みでは注視に該当する。

次に印象に残った箇所を図示させる実験であるが、直前に見た情報に対する印象が薄れないうちにアイマーク実験の直後に行う。印象に強く残るといことは、被験者が意識的に注目し、被験者にとっての地域の急所だと考えられる。これはその被験者にとっての地域の急所を把握するために行い、認識に関するの核になるものだと推察されるからである。

最後に、地域の内容を発話させるのは被験者の地域認識の内容を抽出するためである。取得できるデータの内容は、被験者の語彙力や表現技術に依るところが大きい被験者の都市や地域に対する専門性の高さから、この方法でもデータが取れると判断した。また、発話は、被験者が地域絵図から得た地域に対する理解の内容が、直感的に素早くに反映されると考えられる。この発話データはモデルの認識に対応する。

以上で、鑑賞主体の地域絵図に対する注視と認識についてみることで、描き方への知見を考察する。

(3) アイマークレコーダを用いた実験

被験者の注視特性として、既往の研究を参考に、直径2度未満の円形範囲内に0.2秒以上視線が停留するものを「注視点」の定義として解析を行う²¹⁾。ここで、被験者の視線をナック社のアイマークレコーダEMR-9を用いて測定し、1/30秒間隔の視野画像における水平・垂直方向の注視点の座標値、およびそれぞれの座標値に対する注視停留時間データを得る。「江戸名所之絵」は13人中

13人の注視データを得ることができた。「大日本東京全景之図」は被験者⑩の視線がうまく計測できなかったため無効として、12人のデータを集計する。

被験者全員分の注視点客観的に比較可能にするため、被験者毎の地域絵図に対する角度のズレなどを統一する座標補正を行い、GISソフトMapInfoの一般図の同一座標系に注視点をプロットする。

a) メッシュ分析 共通認知量の分布

注視特性を可視化するためにMapInfoの一般図における注視点データに対するメッシュ分析の方法を考案した。また、被験者から見える地域絵図の要素の大きさを検討しセルの一边を2度とした。ここで用いる指標は山本²²⁾の考案した共通認知量である。この指標は、

$$\text{共通認知量}_i = \frac{\text{総注視時間}_i}{\text{被視時間}} \times \frac{\text{注視人数}_i}{\text{被験者数}} \times \frac{\text{注視頻度}_i}{\text{注視総頻度数}}$$

(本実験では被視時間: 60s, 被験者数: 13人(江戸名所之絵), 12人(大日本東京全景之図), 注視総頻度数: 1276(江戸名所之絵), 1004(大日本東京全景之図))

と表すことができる。iはセルの番号である。注視時間iとはセルiに対する注視時間の合計であり、注視人数iとはセルiに対して注視した被験者人数であり、注視頻度iとはセルiに対する注視点の数と定義される。単位を持たない値であり、この値自体は実験時間や被験者数によって左右するため絶対的な意味を持つ指標ではない。他のセルとの比較によって意味を持つ相対量である。つまり、この値が全体の中で高い場所は「被験者に共通してみられやすい」場所を示し、低いものは「被験者に共通してみられにくい」場所であることを表す。この計算式によって計算したメッシュを図-6と図-8に示す。

「江戸名所之絵」に関しては、共通認知量が大きい箇所が中景部分に並列して集中していることが見て取れる。「大日本東京全景之図」においては、絵図の中央部分とその周囲を取り囲むように共通認知量が集中しており、分散の傾向がみられる。逆に考えれば、注視されにくい箇所は前者では周辺部であり、後者では中心と周辺の間部分であるといえる。

前者の「江戸名所之絵」では特に、中央部分の江戸城や富士、画面右側の上野や遠方の並列に配置されたエレメントに注視が集まっている。中景下部分や近景部分があまり注視されていないのは、突出して強調されるエレメントが無いからだと考えられる。後者の「大日本東京全景之図」では、中央部分の宮城が全体の中で特異的に注視を集め、その周辺に描かれる隅田川に架かる橋梁や、海岸線に注視が集中している。画面を覆う住宅のテクスチャは比較的注視されない。

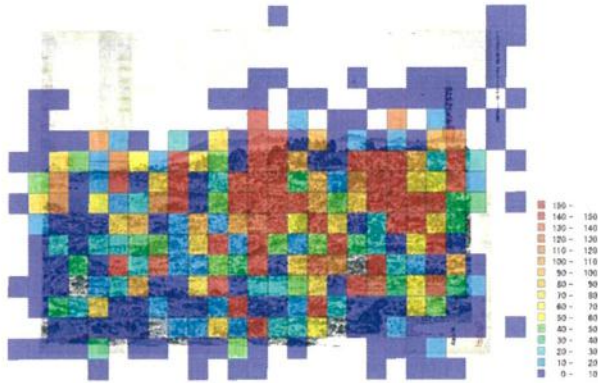


図-6 「江戸名所之絵」 共通認知量分布

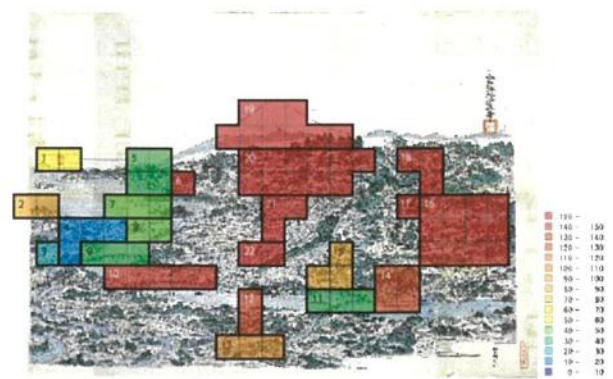


図-7 「江戸名所之絵」 イメージ注視点の共通認知量平均

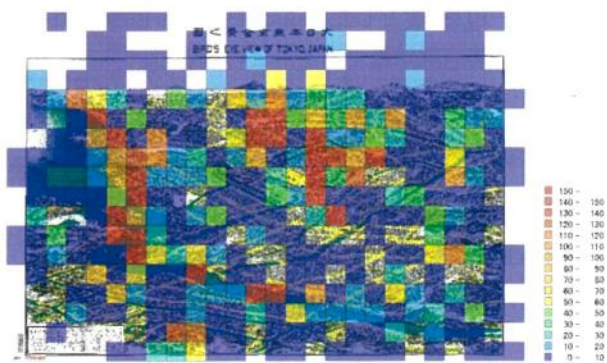


図-8 「大日本東京全景之図」 共通認知量分布

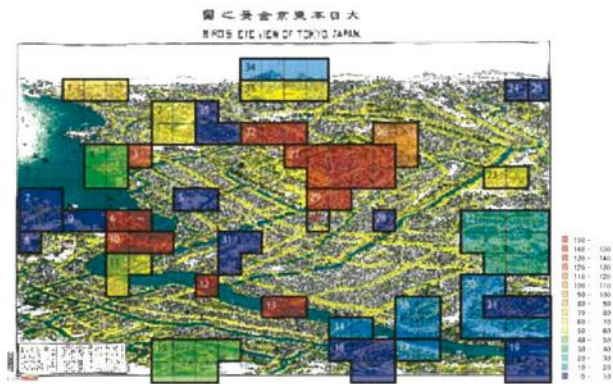


図-9 「大日本東京全景之図」 イメージ注視点の共通認知量平均

描かれる地域の見下ろす角度も、注視の全体傾向に影響を及ぼしていると考えられる。「江戸名所之絵」は、比較的低い位置に視点を置いて地域を描いているため、描かれる地域の領域の特徴は、奥行が小さく、横に長いというものであろう。この制限された領域が、注視を中景部分に集める一つの要因になっていると考えられる。反対に、「大日本東京全景之図」は前者の絵図と比較して高い視点から一覽的に地域を描いている。そのため、地域は奥行豊かで方形の領域を持つ。これは、注視が分散する一つの要因だと考えられる。

(4) 注視点とイメージの注視点の関係

a) 点的なイメージ注視点の共通認知量と指摘人数の関係

印象に残った箇所として指摘されたものをこの図示された箇所を「イメージの注視点」とする²³⁾。その指摘された点的なイメージ注視点の範囲を地域絵図の元素に即してセルで切り取り、その中の共通認知量の平均値を計算した。これにより、イメージ注視点ごとの見られやすさを示すことができる。またイメージ注視点にはIDを振った。図-7と図-9に示す。

ここでイメージ注視点の共通認知量をx軸に、指摘人数をy軸に取り両者の関係性を考察する。この関係の分析から、指摘された元素の配置的特徴や描かれ方の特徴の考察を行う。分析の観点として、指摘人数の平均値とイメージ注視点毎の共通認知量平均の平均値を計

表-2 イメージ注視点の共通認知量と指摘人数の関係の解釈

指摘人数多	指摘されるがあまり見られない場所であり、象徴性の高いもの	指摘されかつよく見られる場所であり、イメージの核となりうるもの
指摘人数少	指摘されにくくあまり見られない場所であり、個人的に捉えられるもの	指摘されにくいがよく見られる場所であり、視覚性のみ強いもの
	イメージ注視点の共通認知量低	イメージ注視点の共通認知量高



図-10 象限による分類の概念図

算して、その大小の関係から4象限に分類(図-10)し、それぞれの象限を表-2のように解釈する。

両絵図のイメージ注視点と指摘人数との関係図を図-11、図-13に、象限により分けたイメージ注視点の箇所を図-12、図-14に示す。

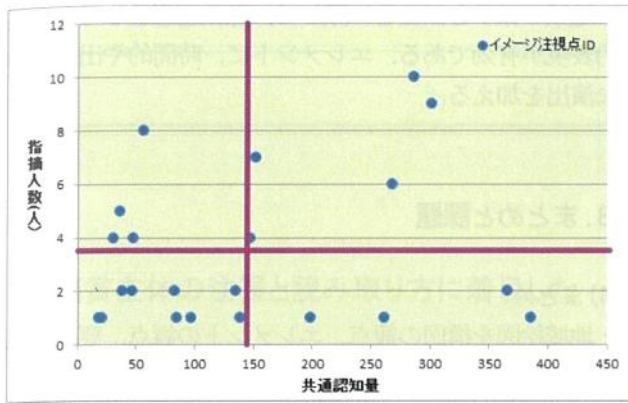


図-11 「江戸名所之絵」のイメージ注視点共通認知量と指摘人数の関係

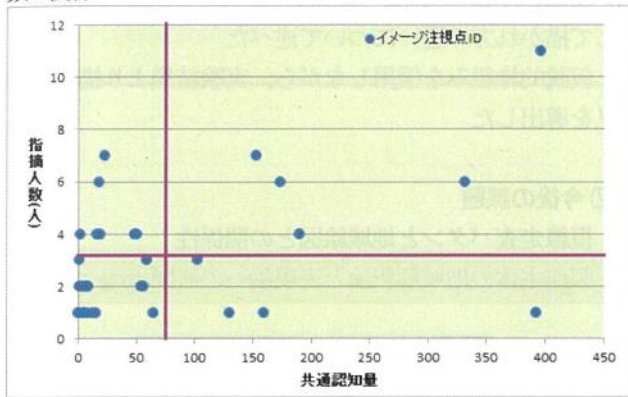


図-13 「大日本東京全景之図」のイメージ注視点共通認知量と指摘人数の関係

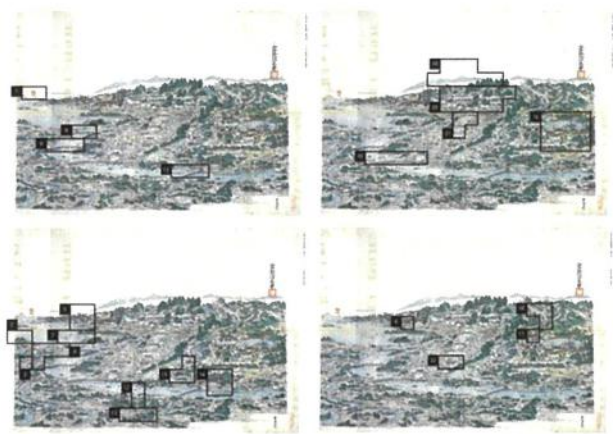


図-12 「江戸名所之絵」象限による分類(右上: 第一象限, 左上第二象限, 左下第三象限, 右下第四象限)



図-14 「大日本東京全景之図」象限による分類(右上第一象限, 左上第二象限, 左下第三象限, 右下第四象限)

b) 各象限の具体的特徴

・ 第一象限

両地域絵図の中でも、特に目を引く場所である。中央部分の城や、強調して描かれた河川にかかる橋梁などである。

このように、中心性の高いエレメントと、境界に関わるエレメントが挙げられる。「江戸名所之絵」に関しては江戸城、日本橋、界限としての上野などを庶民に対して見せる目的の下で描かれていると考えられ、それらが順当に読み取られている事が伺える。「大日本東京全景之図」に関しては、宮城を中心に、近代化の象徴である橋梁を見せるという目的があると考えられ、こちらもそれらが順当に読み取られているといえる。

・ 第二象限

中央部分を取り巻くもので、目を引くものが挙げられる。遠方の太陽であったり富士山といったシンボリック要素も挙げられる。「江戸名所之絵」は江戸の境界のシンボルとしての隅田川橋梁が、「大日本東京全景之図」は遠方の富士や上野公園や亀戸など、活気の演出としての場所が指摘されており、中心的要素に対して意味を付随するエレメントが読み取られている。これは順当な読み取りと言える。

・ 第三象限

小さく描かれたエレメントである。「江戸名所之絵」では河川にまつわるエレメントエレメントが挙げられ、「大日本東京全景之図」では強調して描かれた地上のエレメントが分散して挙げられる。

・ 第四象限

中央部分の大きく描かれたエレメントの周りのエレメントが挙げられる。あくまで中心的なものを支えるものだと解釈できる。指摘数が少ない理由は、第一象限のエレメントの印象が支配的であるためだと考えられる。

(5) 意味に着目した発話分析

a) 意味内容の分類と割合

被験者に「この地域はどのような地域だと思うか」と質問し、それに対して得た発話を意味の種類に着目し、地域絵図ごとに分類した。その結果を図-15に示す。

【空間構造】

地形、中心と周辺、下などといったエレメントの相対的な位置関係や空間の形に関して述べているものである。

【状況】

地域の状況について、「～のエレメントが多い」といった場所の状況に関して説明しているものである。

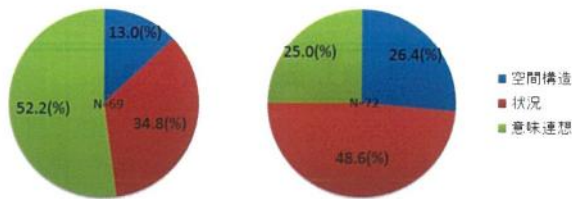


図-15 発話内容の割合 (左「江戸名所之絵」, 右「大日本東京全景之図」)

【意味連想】

読み取った内容から、推測を踏まえて「このような地域であろう」と地域の意味を連想しているものである。

発話を文章レベルで、発話される内容のプロセスについて分析をしているがここでは割愛する。

7. 地域絵図の描き方についての知見

仮説的枠組みと実験の結果を総合して、地域絵図の描き方に関する知見を導出する。特に、地域絵図の構図・エレメントと読み取り作用を中心にして、実験結果の知見を組み込みながら考察する。

(1) 構図・外に出る視点

- ・中央部分は注視が集中しやすい、つまり中央に重要なエレメントを配置していると考えられるため、イメージの核となるべきエレメントを配置する
- ・中央の周辺の河川や橋梁に注視や印象が集中しており、周辺への連続的なエレメントの配置が重要である
- ・注視パターンに強弱が見られることは、図となるエレメントと地となるエレメントがあると考えられる。図は場の景やルートが代表し、地はテクスチャであると考えれば、それらを強弱をもって描くことが重要である
- ・方向を考え遠方を描きこむことは、その地域を他の地域とのつながりで捉えられ、また視点の位置を定位できるため重要と考えられる

(2) 構図・中に入る視点

ルートと場の景の描き方が重要になってくると考えられる。全体を網羅する交通ネットワークと、それらの起点となる場の景によって、鑑賞主体は地域全体を仮想行動すると推察される

(3) エレメント・外に出る視点

- ・重要な場の景については一目でわかるように強調する
- ・それが何か分かるようにと、その場所がどのような場所か分かるように描く

(4) エレメント・中に入る視点

- ・地域の様子を伝えるに際して、意味連想としての演出的表現が有効である。エレメントに、時間的や出来事的な演出を加える

8. まとめと課題

(1) まとめ

- ・地域絵図を構図の観点、エレメントの観点、要件の観点の3つから考える枠組みを考案した
- ・構図の違いによって共通認知量の分布特性が顕著に異なる異なることが分かった
- ・注視と印象の関係から、点的なイメージ注視点を分類して描かれ方の違いについて述べた
- ・仮説的枠組みを援用しながら、実験結果より描画の知見を導出した

(2) 今後の課題

- ・視線走査パターンと地域絵図との関係性
- ・製作主体の地域解釈論と表現論への展開

参考文献

- 1) 中村良夫編著：新体系土木工学58 都市空間論、第7章、技法堂出版、1993
- 2) 柳川正宏、仲間浩一：複合表象としての都市景観に関する研究-江戸名所図会を対象にして-、都市計画論文集31、pp181-186、1996
- 3) 松浦健治郎：吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成：近世城下町を基盤とする県庁所在地都市18を対象として、日本建築学会計画系論文集602、pp105-112、2006
- 4) LAHNICKY Andrea, 中村良夫：問アキスト的読解による景観生成に関する研究、ランドスケープ研究63(5)、pp647-652、1998
- 5) 嶋心治、萩島哲、出口敦、坂井猛、趙世農：広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構図に関する一考察、日本建築学会計画系論文集482、pp155-163、1996
- 6) 橋本政子、堀繁：江戸の河岸の空間デザインとその規範に関する研究、都市計画論文集32、pp283-288、1997
- 7) 真木利江、和田佳奈美：雪舟による四季山水図巻の空間構成、日本建築学会論文集652、pp1623-1630、2010
- 8) 吉坂隆正：魚眼レンズの世界把握について、日本建築学会大会学術講演梗概集計画系45、pp67-68、1970
- 9) 中村昌広：まちづくりへの参加の新しい局面とその道具としての「ガリバー地図」、都市計画論文集24、pp511-516、1989
- 10) 三宅諭、後藤晴彦：映像を媒体とするコミュニケーションツールとしての「街並み起こし絵図」の開発とその有用性の検証-景観イメージの合意形成手法に関する研究 その2-、日本建築学会論文集526、pp223-230、1999
- 11) 佐々木葉、長谷川智也：地域景観認識の表現媒体としての絵図-岐阜県恵那市での試みから-、景観・デザイン研究叢書6、pp238-244、2010
- 12) 杉本史子、磯永和貴、小野寺孝、ロナルドトビ、中野等、平井松午編：絵図学入門、東京大学出版会、2011
- 13) 財団法人東洋文庫レプリカ
- 14) 古地図史料出版株式会社レプリカ
- 15) 前掲15)
- 16) 前掲11)
- 17) ケヴィンリンチ著、丹下健三、富田玲子訳：都市のイメージ新装版、岩波書店、2007
- 18) 篠原修編：景観用語事典 増補改訂版、章国社、1998
- 19) 中村良夫著：風景学入門、中公新書、1982
- 20) 渡部徹、樋渡清二、畠中伸典、田中聡行：画像と注視点の分布、NHK技術研究、pp4-20、1965
- 21) 村川三郎、西名大作、植木雅浩：河川景観の画像特徴量と被験者注視点の関連、日本建築学会論文集479、pp67-76、1966
- 22) 山本徳司：視覚行動の特性指標を活用した景観評価法、農業工学研究所研究成果情報、pp7-8、2003
- 23) 前掲21)